

公共経済学の魅力について

私の担当科目は公共経済学・経済変動論で、研究分野は経済成長論です。公共経済学と経済成長論という両者の間には関連が無さそうに思えるかもしれませんが。しかし、私には両者の間に、密接な関係があるように思えます。

1980年代以降、論じられるようになった内生的成長理論と呼ばれる考え方によれば、例えば(利潤の獲得を目指して企業によって行われる研究開発により生み出された)新技術が経済成長の原動力となりうる可能性があります。技術は、通常の財・サービスとは異なった性質をもっているため、自由競争の促進を目指した政策が、新技術の開発を阻害し、経済成長を鈍化させてしまう可能性があると考えられています。自由競争が世の中に弊害をもたらす場合、規制を行うことなどにより弊害を是正する役割を政府が担うことがあり、そうした政府の役割は公共経済学の考察対象となっています。(経済成長をもたらす)新技術の開発が自由競争のもとで効率的に実施できないのであれば、状況を改善する為に、政府の介入が必要となるかもしれません。もしそうであるならば、公共経済学と経済成長論は無関係であると言えなくなるのです。

これまで私は、経済成長という観点から研究を行ってきましたし、今後もしばらくは経済成長を中心として考察を行って行きたいと考えています。しかし、心の中には、「競争は万能ではない」という問題意識をもっています。競争を促進することで効率的な経済活動を行えるようになり、より豊かな生活がもたらされるかもしれませんが。しかし、競争が私たちの生活を脅かす原因となるケースも否定できないのです。私は、競争がもたらすメリットとデメリットを慎重に検討するという姿勢を大切にしたいと考えています。経済学は万能ではないので、万人を幸福にする処方箋を提示してくれることはありません。しかし、私たちの生活が少しでも豊かになるように政府がどのような政策を実施できるのかを検討することは十分に価値のあることのように思えます。そして、そのような政府の役割を考察する公共経済学は十分に魅力的なものではないでしょうか。



■経済変動論
■公共経済学Ⅰ・Ⅱ

岡田 知之
(おかだ ともゆき)

愛媛県出身。福岡大学経済学部卒業。慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程修了、博士課程単位取得満期退学。趣味は散歩。(何の目的も持たず、何も考えずにふらふらと歩くことが好きです。)